琉球大学学術リポジトリ

琉球における作物の主要害虫 (2) ウリミバエ Dacus curcurbitae Coquil'e

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学農家政学部
	公開日: 2011-07-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 金城, 政勝
	メールアドレス:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21419

琉球における作物の主要害虫(2)

ウリミバエ (Dacus curcurbitae Caquil'e)

1. はじめに

ミカンコミバエ Dacus dorsolis Hendelがカンキッ類、バンジュロウ等の生果実に大害を与える 重要害虫として知られると同様にウリミバエはウリ類等の果菜や生果実に大害を与える重要な害虫として知られている。

熱帯生果実の本土向け輸出と共に果菜類の輸出 が沖縄産業の発展への道として重要視されつつあ る今日, ウリミバエとミカンコミバエの駆除は大 きな課題となっている。

また,近年(1970年)久米島に本種が発生していることが認められ,その駆除および沖縄本島への侵入防止が問題化している。

ここでは今日までウリミバエについて諸研究者 の研究結果によって明らかにされたことについて 簡単にまとめて報告する。

2. 分 類

昆虫網 Insecta 双翅目 Diptera ミバエ科 Trypetidae

ミバエ属 Dacus

種名 Curcurkitae Hendel

和名 ウリミバエ

英名 Melon fly

3. 分 布

本虫の分布図は本誌のNo. 181 (1970 年 12 月 号) のミカンコミバエで掲載してあるが, ここで 述べると

台灣,中華民国,香港,フィリッピン,カンボジア,ベトナム,ラオス,ビルマ,タイ,マレーシア,セイロン,インド,琉球(八重山,宮古群島,および久米島)などである。

琉球においては1919年に八重山群島の小浜島で 初めて発見され、その後各地に伝播し、1929年に 宮古群島で発生、沖縄本島では1947年に勝連村に 1948年には美里村において1度発生が見られたが その後消滅して現在では再発生は認められていな い。その後1970年に久米島に発生が見られ、沖縄 本島への侵入が心配されている。

4. 寄 主 植 物

ウリミバエはその名の示すように主として、ウリ類の害虫であるが、他の植物にも害を与える。

寄主植物の多くは主に農作物であるが、琉球列 島では野生の寄主植物(特にウリ科)も少なくは なく、ウリ類などの栽培が少ない冬季の寄主植物 となっているものもある。

沖縄から17種54種が確認されているが主な寄主 植物は下記のものである。

トウガ,スイカ,シロウリ,キウリ,カボチャ,ユウガオ,ヘチマ,ニガウリ,ハヤトウリ,ケカラスウリ,リュウキュウカラスウリ,オキナワスズメウリ,クロミノオキナワスズメウリ,サンゴジュスズメウリ,ハヤトウリ,トマト,ナス,シマトウガラシ,インゲン豆,ササゲ,フジ豆,パパイヤ,マンゴウ,オクラ,タカナ,タマナ,ハナヤサイ,イチヂク,クダモノトケイソウ,ポンカン,バンジロウ。

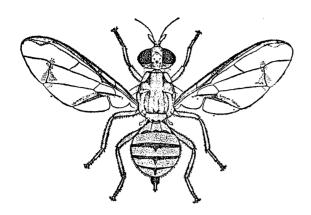
5. 形態

成虫:体長8~9 ma内外, 黒と黄のだんだら模様でミカンコミバエとよく似ているが全体的に大きい。

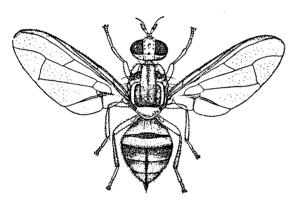
卵:長さ1.2m内外, 経0.28m乳白色で両端が 尖りやや曲した円筒形。

幼虫: 体長は1令で1.5~2.6mmの乳白色, 3令 後期の老熟幼虫は淡黄色で7.0~11.5mm。

蛹:ミカンコミバエと同様、擬蛹期があり、4 令期をすごし、さらに脱皮して蛹化する。囲蛹は 黄褐色のたわら状、長さ5.5mm内外、ミカンコミバエの蛹との区別は困難である。



ウリミバエ(雌) Dacus curcurbitae Coquillett



ミカンコミバエ(雌) Dacus dorsolis Henden

6. 生態

生活史や生態は前号で述べたミカンコミバエと 似ている。

年間、7~8回の世代を繰返す、ウリミバエは 卵、幼虫、蛹期間が短いのに反し成虫期間が長い ため、産卵期間も長い、そのため野外においては 四季を問わず常に各態が混在しているが5~6月と9~10月にもっとも個体数が多い、沖縄での産 卵期間は44~98日、1雌の産卵数は800~1000個、1回の産卵数は7~20個で産卵は午前中に行われる。産卵はミカンコミバエと違って本種は熟した 果実を好まず、ウリ類では幼果、幼芽に産卵される。加害を受けた被害果は奇形、早熟、落果、腐敗する。なお本虫が侵入存在する場所のわからないものでも果実を指で押してみると軟弱な感じがするのですぐわかる。

ウリミバエの成 虫は 雌 雄とも傷ついたウリ類 の生果実に誘引され、またイーストや大豆の加水 分解にも強く誘引される。またCuelure. Anisyl. acetcene等化学的誘引物質にも雄が強く誘引される。

7. 防除法

ミカンコミバエの防除法に大体準ずる。即ち

(1) 寄主植物の移動禁止

発生地域から他の未発生地域への寄主植物の移動禁止をする。

- (2) 発生地域での防除法
 - (イ) 果実に袋掛けを行なう、最近ビニール製の 袋が安価に得られるのでそれを用いて加害防止 の効果をあげている。
 - (ロ) 落果, その他の被害果は速やかに集めて**焼** 却する。
 - (ツ) 野生の寄主植物の除去 野生の寄主植物が発生源となっている場合が あるので、それらを除去する。
 - (二) 圃場における薬剤散布 本虫は土壌中において蛹化するのでヘプタ, アルドリン粉剤などを土面散布または土壌中に すき込んで蛹の防除につとめる。
 - (お) 誘殺剤による防除

Cuelure. とダイブロンを 97:3の割合に混合した誘殺剤 $5\csc 1.5g$ の脱脂綿に浸みこませたもので誘殺する。

() 天敵による防除・

八重山では本虫の天敵としてウリミバエコマ ユバチ (Opius fletcheri) が分布 し て い る が、その保護増殖を計る必要がある。

(ト) 不妊雄の放飼

ハワイにおいては放射能で不妊にした雄を放 飼し、それを野外のメスと交尾させて無受精卵 を産下させ、個体数を減少させていく方法で本 虫の防除が試みられている。

(金城 政勝)